

わたしの聖戦

◎◎女性が働くという文化◎◎ 74

医学ジャーナリスト・医学博士 植田美津恵

ドラマの主人公たち

旧満州国といえば、ラストエンペラーこと愛新覚羅溥儀を思い起こす。これまで映画やドラマで何度も目にし、俳優が変わってもあの独特の風貌は目に焼き付いて離れない。ところが、ラストエンペラーの妻である李玉琴を主人公にしたテレビドラマづくりをめぐって

的だったこともあり、話はおもいきや、途中で脚本の使用権が移動したり、それに伴って内容が変わっていたりして、放映なかばでくだんの長男が放映禁止を訴えているのだという。

くものも理解できる。喜々として宮廷入りしたのと、歴史に翻弄された結果であるのとでは印象が全く異なる。

どの国でも、著名人をモデルにした映画は数多くある。かのイギリスには歴代の女王を主役にした映画があるし、日本で

愛新覚羅溥儀



時代を作り上げた人」である。本人の写真などが残っていれば、尚具体的な人物像を描きやすく、楽しさも倍増だ。昨年の大河ドラマの大ヒットの要因も、すべての登場人物に親しみが持てたことが大きかったのだろう。

一方で、今回のように本人の家族が実在していれば、そこにはどうしても近い立場での主張や言い分が出てくる。このあたり、どう折り合いをつけるかは、よほど慎重に対処しなければせっかくの作品にケチがついてしまう。

多少の行き違いやズレはある程度はいたしかたのないところだ。

近い歴史上の人物なら採めるが、少し遠い時代なら本当のところは「わからない」ことだらけだから、その分争いを招くことは避けられる。大河ドラマで最も人気があるのは戦国時代であるが、ドラマティックな時代であるのに加え、ある程度歴史に忠実ならば比較的自由に作れるあたりも扱いがてがよいのかもしれない。しかし、もし本人たちが生きていたら間違いなく異議申し立てをしたくなるのは、明智光秀や吉良上野介ではなからうか。あまりにステレオタイプな描かれ方にきつとあの世で地団駄踏んでいることと思う。それとも、ふたりともなかなかの人物なので、もしかしたらあきらめ顔で本当ではない自分を楽しんでるのかもしれない。

イラスト・三浦義雄